

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720242

研究課題名(和文) 都市貧困地域における共同性の意識と「共通の枠組み」に関する人類学的研究

研究課題名(英文) The Anthropological Study of the Consciousness of Cooperation and Common Framework in Depressed Areas of Asian Urban Cities

研究代表者

牧野 冬生 (MAKINO FUYUKI)

早稲田大学・アジア太平洋研究センター・助手

研究者番号：50434387

研究成果の概要(和文)：

本研究は、「都市貧困者と隣接性を伴う居住」、「都市における多元的帰属意識と場所性」、「『共通の枠組み』に関する理論と方法」の3つの問題系に関して、メトロマニラ貧困地域を中心に人類学的フィールドワークと建築学的実測調査を軸にした調査を実施した。過密な都市空間における生活者の生活形態及び共同体を分析し、多元性を有する特徴的な帰属形態の様相を明らかにすると共に、住民との相互批判的な対話を可能とする「共通の枠組み」として空間実践モデルを検討した。

研究成果の概要(英文)：

In this study, I carried out the anthropological fieldwork on the three main topics, “urban poor and their living spaces”, “plural sense of belongings and ‘placeness’”, and “theory and practice of the common frameworks”. I suggested the methodology to analyze human relationships formed in the space with adjacency and examined the face to face relationships among the residents in the shared places in the poor areas in Metro Manila. This study also considered the spatial model as a common framework that makes mutual criticism with the residents possible.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：コミュニティ計画、スクウォッター、メトロマニラ、文化人類学、貧困地域、開発と文化

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、メトロマニラ貧困地域の CMP (Community Mortgage Program) 事業の

社会的影響に関して、アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所 (Ateneo de Manila Univ. IPC)、FDUP (Foundation for the Development of the Urban Poor)、UPA

(Urban Poor Associates), TAO-Pilipinas, Inc.の共同調査の結果を元に提起された。ここでは、不法占拠地域居住者の住居・居住形態の予備的研究、都市居住者における伝統の変容、実測調査による住居・居住形態の分析等の活動を展開してきた。また、上記共同研究における研究会において、調査結果を技術的な側面（エンジニアリング的な貢献）に応用する学際的な研究への可能性を議論し、米国応用人類学会（Society for Applied Anthropology）において不法占拠地域居住者の住居・居住形態に関する研究成果の一部を報告した。

こうした研究活動を踏まえ、研究代表者は本研究において、人類学的なフィールドワークと建築学的な実測調査によって得られた調査結果を<住居の隣接性>をキーワードとして再検討し、一方で、隣接性を伴う人間関係は、よりマクロ的なシステムに包含されているため、トランスナショナリズムの概念を援用しつつ、多元的な人間関係の実態を歴史的及び政治的な側面を含めて描き出すことを目指した。同時に、従来の文化人類学的な視野を越えて新しい表象形式へ寄与させる基礎的資料として実践モデル<協働空間の実践>を提示するため、本研究において独自の方法を模索していた。具体的には、不法占拠地域における建築的提案である「メトロマニラ不法占拠地域における建築的提案」を深化させ、より実践的なモデルとして現地に提示することにより、開発援助における相互理解へ向けた「共通の枠組み」のあり方を検証する可能性について取り組んでいた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、過密な都市空間における生活者の生活形態及び共同体の分析を通して、多元性を有する特徴的な帰属形態の様相を明らかにし、住民との相互批判的な対話を可能とする「共通の枠組み」として、空間実践モデルを提示することが目的である。具体的には、以下3点の問題系を明らかにすることで、メトロマニラ貧困地域を含むアジアの都市貧困地域で特徴的な隣接性に伴って生み出される<共同性の意識>を分析し、貧困地域における空間実践モデル<協働空間の実践>を提案することにある。

### ①都市貧困者と隣接性を伴う居住

狭小住居及び居住地域の<共同性の意識>に関する分析：貧困地域における実際の生活形態においては、住民同士は顔の見える人と人との生活の場においてある共通の帰属意識を共有して生活を営んでいる。この隣接性に基づいて作り出される<共同性の意識

>の実態を住民個別のミクロ的視点から検証すると共に、その意識が作り出される背景にあるコミュニティの歴史性と政治性について検討する。

### ②都市における多元的帰属意識と場所性

共有空間及び非共有空間に関わる帰属意識の実証的解析：都市においては、(1)で述べた空間を共有する隣接性に基づいた生活が基本にあると同時に、実際の場所を共有しない多くの関係性や帰属意識を保持している。共有空間及び非共有空間の帰属意識の実証的解析をトランスナショナリズムによるマクロ的視点から分析することで、都市における多元的帰属意識の議論を深化させる。

### ③「共通の枠組み」に関する理論と方法

<協働空間の実践>の提示と理論的考察：「共通の枠組み」の理論的考察にあたっては、「メトロマニラ不法占拠地域における建築的提案」という実践案をさらに検討すると共に、都市計画的アプローチの可能性を検証し、相互理解に向けた「空間」を軸とした方法論の確立を試みる。

(2) 本研究の特色は、学際的なアプローチにより生活者の私的・公的人間関係などソフト面における諸条件を抽出することとどまらず、「居住形態」と「住居の実測」というハード面を網羅的に調査する点であり、こうしたフィールドワーク手法により、居住形態と住居構造の相互関係を把握できると考えた点にある。住民が受け入れ可能な諸条件を考慮した<協働空間の実践>を提案することで、<共通の枠組み>による住民との相互理解の可能性を検討することを目指したといえる。本研究において予想される成果は、以下の諸点にあった。

① 貧困地域の住居・居住形態から抽出される狭小住居の特徴を、アジア地域に特徴的な都市生活者の一形態として捉え、都市生活における居住の新たな可能性を提示できること。

② 狭小住居における同居者・近隣生活者間における私的・公的関係性より、血縁者同士による閉鎖的な伝統的人間関係から、多元的な人間関係への変容を提示できること。

③ 文化人類学に建築学的視点を導入して固有の地域文化を尊重する住居及び居住形態のあり方を検証することで、複層する文化形態を記述するあたらしい試みを検証できること。

### 3. 研究の方法

本研究は、2008年度～2010年度までの3年計画で展開した。研究は、年次をおって「問題の所在の検討」、「研究課題の深化」、「報告書の作成」に重点が置かれ遂行された。

#### (1)2008年度

初年度においては、フィールドワークによって「都市貧困者と隣接性」「都市における多元的帰属意識」「共通の枠組みに関する理論と方法」の各研究テーマにおける論点を整理し、問題点を確認した。具体的には、以下の通りである。

##### ①都市貧困者と隣接性を伴う居住：

フィリピン大学デリマン校内における不法占拠地域（コミュニティ名：Daang Tubo）においてフィールドワークを実施した。住居形式を成立させている要因分析（プライバシー、安全保障、帰属意識、血縁関係、労働の共同、宗教・世界観）と共に、建築学的な調査（住居の平面／断面構成・建築材料・構造）を同時並行に行い居住形態から技術的要素まで横断的な調査を実施した。

住居調査において得られた具体的な空間構成と、インタビュー調査によって得られた同居者関係と近隣者間関係を基にして、住民の空間認識に着目して分析を行った。具体的にはメトロマニラという過密都市空間における狭小な住居・居住形態が誘発する同居者関係と近隣者間関係を把握することである。人と人が顔を合わせる隣接した「共有する空間」を調査対象としているため、地域や住居に結びついた人間関係に重点を置いた。

##### ②都市における多元的帰属意識と場所性：

グローバル化の進展による流通・交通・情報の急転回と共に「時間-空間の圧縮」が加速度的に進行し、場所の優越を疑問視する視点、つまり所属意識に必ずしも自分の生きている空間がかかわっていない状況が如実に語られている。隣接性に伴う人間関係の一方で、非共有空間における帰属意識も同様に扱っていかねば、都市生活者の本来の姿は見えてこない。こうした変化は、少なくともそれまでイメージの上では生きていた農村（出身地）と都市（移民先）という二分法的認識に変化をもたらした。地域間で進行している多元的帰属意識と多元的ネットワークを、現在の都市変容に応じたマクロな視点（トランスナショナリズム）によって捉えることが必要であった。

##### ③「共通の枠組み」に関する理論と方法：

実践モデルは、フィールドワークによって得られた文化人類学的な知見を、調査者と調

査対象地域の双方から再検討するための「共通の枠組み」の一形態として捉えられる。こうした実践モデルの提示には、住民参加型を開発手法として確立することの困難さと共通した問題群が存在する。本研究では技術的要素を特別な技術者による閉鎖的なものとして捉えるのではなく、住民が自由に活用できる開放系として捉えることで、「空間」を軸とした実践モデル＜協働空間の実践＞の具現化を試み、その成果を住民と共有することを試みた。

#### (2)2009年度

2年目については、各テーマの議論を一層深化させる共に、「共通の枠組み」についてはワークショップを開催し、相互批判的な考察の場とした。

##### ①都市貧困者と隣接性を伴う居住：

初年度のフィールドワークの結果を踏まえて、フィリピン大学デリマン校内の他の不法占拠地域までフィールドワークの範囲を広げた。特にCMP事業が実施された地域（不法占拠地域における土地の所有権問題を解決済み）において、現地NGOであるFDUPと共に「隣接性」に着目した居住形態の調査を行った。また、貧困地域のコミュニティは外的要因（メトロマニラの都市政策、地元NGOや援助機関の介入、大学の政策など）によって左右される部分が非常に大きいため、本年度の調査ではコミュニティ内部の分析にとどまらず、外的要因を包摂したコミュニティの歴史性と政治性についても重点をおいて住民の言説と共に分析の対象とした。

##### ②都市における多元的帰属意識と場所性：

メトロマニラ貧困地域における多元的帰属意識を考察するときに、人の移動は地方から都市へ向かう国内移民ではあるが、多民族国家としてのフィリピン社会の特殊性を考慮し、トランスナショナリズムの概念を援用することで、グローバルな側面を意識しながら検討した。特に、トランスナショナリズムの分析概念の中でも「帰属意識」と「地域性の再構築」といった側面に焦点を当て、隣接性というローカルな場とグローバル化した帰属意識の相互関係について考察した。

##### ③「共通の枠組み」に関する理論と方法：

実践モデル＜協働空間の実践＞の検証作業を行った。具体的には、実践モデルを媒介にして、貧困地域における建築及びコミュニティの期待される将来像について、地元NGO（FDUP：Foundation for the Development of the Urban Poor）、地元人類学者（アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所）、TAO-Pilipinas, Inc.、及び貧

困地域居住者とワークショップを開くことで実践モデルを基にした相互批判的な解釈と、相対的な文化理解をはかる考察の場とした。

### (3)2010 年度

3 年目は研究報告書の作成に重点を置くと共に、前年度に明らかになった問題点を踏まえて実践モデルを再検討した。実践モデル<協働空間の実践>(図面、模型及びプレゼンテーションシート)については、初年度から検討してきたメトロマニラ貧困地域における建築的提案をさらに精緻化すると共に、地域の調査者と住民の間で相互批判的な解釈を可能とする共通の枠組みに関して「視覚化されたイメージ」という実践モデルを定義し、最終年度はその応用を試みた。

## 4. 研究成果

主な研究成果は年度別に下記の通りである。

### (1)2008 年度

2008 年度における重要な課題は、「都市貧困者と隣接性」、「都市における多元的帰属意識と場所性」、「『共通の枠組み』に関する理論と方法」の3つの論題に関する現地調査であった。計画では、フィリピン大学デリマン校内の不法占拠地域(Daang Tuno)のみの予定であったが、フィリピン現地NGOの協力を得て、メトロマニラにある他の3つの不法占拠地域(SAMARIMA-HOA・MACODA-HOA・SAN AGUSTIN-HOA)においても現地調査を実施することができた。同時に、不法占拠地域の住居形式を成立させている要因分析・建築学的調査(平面と断面構成・建築材料・構造・工法)を並行して行い、住居形態から技術的要素までの横断的な調査から本研究課題における問題の所在を再検討する作業を実施した。その際、当該地域で実施されているコミュニティ開発プロジェクトに関する社会的影響を抽出する中で、地域住民の都市認識に影響を与える政府や開発援助組織の開発理念と実施指針についても調査する必要性を確認した。不法占拠地域のコミュニティ開発及び住居に関する資料収集は、フィリピン大学及びアテネオ・デ・マニラ大学において重点的に資料収集を行った。2008 年度の具体的成果は、以下の3点である。

#### ① 3つの視点の導入(近景・中景・遠景)：

隣接性を伴う人間関係の把握には共有空間と非共有空間の両面における帰属意識の把握が重要であり、そのためには、個人住居

という近景、隣接する住居群という中景、コミュニティ計画(都市計画)的な鳥瞰視線を含む遠景という3つの視点を同様に扱っていかねなければ、都市生活者の本来の姿は見えてこないという点である。こうした点を踏まえてメトロマニラ貧困地域における顔を合わせる共有の場を分析することで、親類・血縁や同一出身地との関係を中心に形成されるコミュニティの中心軸が、異なる出身地を持った移民者同士の非同源性を包含する新たな人間関係へ移行しつつある現状を捉えることができる。具体的には、顔を合わせる共有の場における住民同士の関係を「場 place」と「場面 scene」を通じて把握することで、都市貧困地域に特有の隣接性を伴う空間を分析する手法を提示できた。

#### ② 「場 place」と「場面 scene」を視覚的イメージとして共有：

フィールドワークによって得られた文化人類学的な知見を、調査者と調査対象地域住民の双方から検討する実践モデルの具現化に関して、住居や空間を視覚的に表現する建築的表現(模型・スケッチ・ドローイング)を応用することで、上記のフィールドにおける「場 place」と「場面 scene」に関する住民の認識を、具体的な視覚的イメージとして共有することが出来た。

#### ③ 実践的建築行為との接近：

上記の遠景・中景・近景の視点を繋ぐために、「今ここ」の場面分析を真髄とする人類学のアプローチに対して、「非一場 non-place」を「場 place」に変容させることが可能な実践的建築行為の接近を試みた。都市を語る主体(人類学者)から都市を構築する主体への移行は、都市計画的な視点によって身体性に根ざした場所感覚を欠落させるものではなく、生活空間を構築するという実践によっていわば内部者として都市を語るような主体性の移行を意図したものである。

こうした点を踏まえた実践モデルの具現化の詳細な指針は、次年度以降の課題となった。

### (2)2009 年度

2009 年度における課題は、前年度の問題点を踏まえて、3つの問題系に関して一層の深化をはかることであった。前年度に残された課題であった「地域住民の都市認識に影響を与える開発理念と政策指針」については、フィリピン・メトロマニラにおける CMP 事業(コミュニティ抵当事業)と Homeowners Association (HOA) という法人組織に焦点を置き、都市貧困地域における人間関係を、経済と伝統の両方の世界に足を踏み入れた

戦略的な生活実践と捉えることで、緩やかで曖昧なネットワークとしての都市観を記述しようと試みた。2009年度の具体的成果は以下の2点である。

①「共通の枠組み」に関わる実践モデルの具現化：

調査者と住民の間で相互批判的な解釈を可能とする共通の枠組みに関して「視覚化されたイメージ」という実践モデルを発展させ、その応用を試みた。具体例としては、第11回「まちの活性化・都市デザイン競技」において、現地調査を踏まえた居住空間の将来像を様々な解釈が可能な視覚的イメージとして表現し、多くの相互批判的意見を引き出した点にある。本提案は高く評価され、奨励賞を受賞した。

最終年度へ向けて上記の実践モデルを進展させ、住民との相互批判的な対話へ向けた詳細なプロセス構築を進めた。

②フィリピン・メトロマニラ型ともいうべき場所性の存在：

フィールドワークの結果をメトロマニラ貧困地域における建築計画に応用するプロセスの中で、メトロマニラ型ともいうべき場所性の存在を認識した。具体的には、都市貧困地域における隣接性を伴う住居空間と本地域特有の人間関係を成立させている〈顔〉を合わせる場所性を、親族関係（血縁関係）を超えたコミュニティを形成する重要な一要素として捉え、メトロマニラ貧困地域に特徴的な独自の空間として定義した。

(3)2010年度

本研究の最終年度にあたる2010年度は、各問題系における課題をまとめると共に、補完すべき資料の収集に努めた。また、前年度までの研究成果を踏まえて研究全体の総括を行った。具体的成果は、以下の2点である。

①セルフビルドによる空間構築手法を住宅改善プログラムへ応用：

メトロマニラ貧困地域を中心とした東南アジアの都市貧困地域において人類学的視点を軸に実施された建築コンペ・住居改善プログラムに係る資料や図面等を発掘し、その成果を元に **Refugees International Japan** (国際難民支援会)主催の国際建築設計コンペ「コンテナで輸送可能なコミュニティセンター」に参画(2010年9月)し、「**Design for Hope** 木・土・藁によるセルフビルドによる空間構築」を計画した。本計画は、セルフビルドによる空間構築を軸にして住居の内外を緩やかに結ぶことで「都市における多元的帰属意識と場所性」の空間化を実現し、多民族共生に向けた生活空間の構築に関する議

論に発展させた(2010年11月研究会)。

②「旅的要素を含んだ居住観」の国際労働移民への応用：

アジアに特徴的な都市貧困者は、地元住居と労働先である都市住居(本研究では主にメトロマニラ貧困地域)を頻りに往復しながら居住する特徴的な形態を維持しており、こうした居住を旅的要素を含んだ居住観として再定義した。それは、地元への頻りに一時帰省を、「観光的要素を含んだ経済的な視点」と「紐帯関係を保つ社会的視点」の両面から考える居住概念といえる。こうした居住概念は、国を超えた国際労働移民の行動形式に援用することが可能であり、第24回ラテンアメリカ研究会(国際会議)において、研究成果の一部を発表した(2010年10月)。

③「共通の枠組み」に関する視覚的イメージの有効性と問題点：

「共通の枠組み」に関する理論と方法については、前年度までに提出した二つのコミュニティ計画の提案を基底に構築した「視覚化されたイメージ」という実践モデルについて、国際開発学会第21回全国大会(2010年12月)にて議論し、その有効性と問題点について確認した。「共通の枠組み」においては、理論的な考察を応用した具体的な実践面においては、まだ多くの問題点を残している。

「空間による枠組み」を取り入れたワークショップで重要な点は、視覚的イメージがコミュニティの方向性を示唆する象徴として住民に共有された点であった。しかし、立体的な模型などの具体的なイメージが住民それぞれのイメージを想起させやすいのと同時に、やはり画一的なイメージを押し付けることにも繋がりやすく、住民やNGOからも強い批判の対象ともなった。こうした、「空間による枠組み」に関わる視覚的イメージのコミュニケーション的側面については理論的側面からさらに再考する必要があるが、NGOや住民同士が具体的な意見を交換することができたのが視覚的イメージの非階層的側面によるものであり、イメージの批判的理解も含めて同じレベルの視線をもって利用された点は高く評価できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

①牧野冬生, “国際開発援助における住民協働プロセスと「視覚化されたイメージ」の共有—メトロマニラ貧困地域における住宅

改善プロジェクトの事例からー”, 国際開発学会第 21 回全国大会報告論文集 巻号:2010 年度版, 国際開発学会, pp.213-216, 査読無, 2010 年.

②Makino, Fuyuki, “A Study on ‘Transnational Housing’ from the perspective of Architectural Anthropology”, Proceedings Papers in XXIX International Congress of the Latin American Studies Association, LASA 2010, 巻号無, Latin American Studies Association, pp.1-17 (Web Journal), 査読無, 2010 年.

③牧野冬生, “建築人類学試論—新しい知を生成する場の構築に向けて—”, アジア太平洋討究 vol.14, アジア太平洋研究センター, pp.137-157, 査読無, 2010 年.

④平居直, 牧野冬生, 平林直, “善利組普請”, 新都市 vol.63, 財団法人 都市計画協会, p.46, 査読無, 2009 年.

⑤牧野冬生, 「建築計画へ向けた建築人類学の実践的応用」, 小野梓記念賞(学術賞)受賞論文 巻号:2010 年度版, 早稲田大学アジア太平洋研究科, pp.1-328, 査読有, 2009 年.

⑥牧野冬生, “アジア都市の人類学的分析に関する試論 I - 「場 place」と「場面 scene」-”, 駒沢女子大学研究紀要 No.14, 駒沢女子大学, pp.165-179, 査読無, 2008 年.

[学会発表] (計 3 件)

①牧野冬生, “国際開発援助における住民協働プロセスと「視覚化されたイメージ」という枠組み”, 国際開発学会第 21 回全国大会, 早稲田大学, 2010 年 12 月.

②Makino, Fuyuki, Session Chair, “A Study on ‘Transnational Housing’ from the perspective of Architectural Anthropology”, XXIX International Congress of the Latin American Studies Association, LASA 2010, Canada Toronto, 2010 October.

③牧野冬生, “発展途上国の学校建築プロセスの提案 Designing the School of Tomorrow”, Millennium School Design Competition 記念シンポジウム, MIT(マ

サチューセッツ工科大学), 2008 年 5 月.

[図書] (計 2 件)

①牧野冬生, 文化人類学教室教材, 文化人類学 I・II '08, 駒沢女子大学映像コミュニケーション学科, ページ数無(DVD 形式), 2009 年 3 月.

②牧野冬生, 「アジア都市における隣接性を伴う場所性と都市的共同体に関する人類学的研究 —メトロマニラ貧困地域における住まいと生活実践の事例から—», 早稲田大学 (学位論文), pp.1-264, 2008 年 6 月.

[その他]

ホームページ (URL) :

<http://www.komajo.net/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

牧野 冬生 (Makino Fuyuki)

早稲田大学・アジア太平洋研究センター・助手

研究者番号 : 50434387

### (2) 研究協力者

#### ① 亘 純吉 (Watari Junkichi)

駒沢女子大学人文学部  
教授

研究者番号 : 19320140

#### ② 菊地 靖 (Kikuchi Yasushi)

早稲田大学  
名誉教授

研究者番号 : 01041091

#### ③ ユルクック ヘルブリング (Jurg Helbling)

チューリヒ大学文化人類学教室  
教授

#### ④ メリー ライスリス (Mary Racelis)

アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化  
研究所

研究者 (元所長)